野生きのこの鑑定に関する相談の取りまとめ結果について

衛藤　慎也・坂田　　勉

1．はじめに

近年野生きのこに対する関心が全国的に高まっており，野生きのこブームとも呼ばれている。各地できのこ狩りのイベントが盛んに催され，野生きのこに関する出版物やマスコミの報道も増加している。当所に寄せられる野生きのこの鑑定に関する相談件数も大変多く，特徴的な業務の一つとなっている。そこで，野生きのこの鑑定に関する相談について記録し，1997年から2001年までの状況を取りまとめた。

なお，相談記録の整理及び取りまとめにあたって，当所の住本加代子試験研究補助嘱託員に多大なご協力をいただいた。ここに記し厚くお礼申し上げる。

2．方　法

野生きのこの鑑定についての相談があった場合，相談の年月日，相談の形態（来所・配送・電話），相談者の住所・氏名・性別，きのこの種類について記録した。電話による相談は，電話のみで相談を済ませた場合を電話とし，電話後にきのこを持って当所へ来た場合は来所，宅配などできのこを当所へ送って来た場合は配送とした。また，複数の人から相談があった場合は代表者のみを記録し一件として扱った。なお，平日における一般の人からの自主的な相談に限定し，10月に行っている当所の一日公開での対応，マスコミからの問い合わせ，センター外での対応は除いた。

次に，1997年から2001年までの記録を整理し，年間相談件数，形態別相談件数，月別相談件数，相談者の性別相談件数，相談者の住所別相談件数，きのこ別相談件数について取りまとめた。

3．結　果

3.1　年間相談件数

年間の相談件数を図1に示す。年に2回以上の相談があった人は全体の1割程度で少なく，多くの人から相談があった。5年間の延べ相談件数は483件で，年平均96.6件であった。年間の延べ相談件数が最も多かったのは2000年の141件で，この年は10月だけで延べ110件の相談があった。1999年と2001年は他の年に比べ相談件数が少ないがこれについては後で述べる。

なお，以下の統計において，年間相談件数は全て延べ相談件数を用いる。

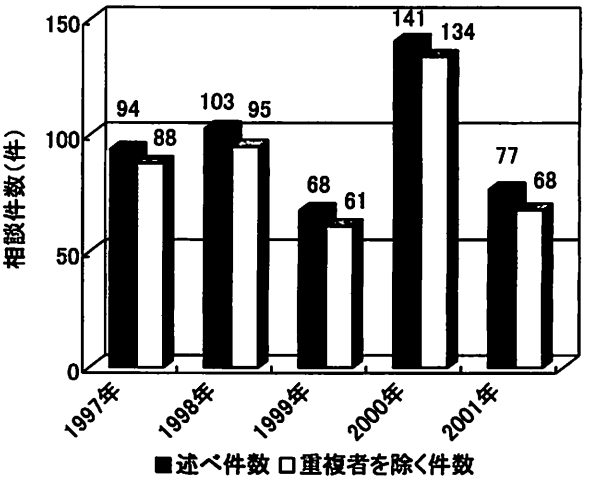

図1　年間相談件数

3.2　形態別相談件数

形態別の相談件数を表1に示す。来所による相談がほとんどで電話や配送による相談は少なかった。電話ではきのこの正確な鑑定が出来ないため，電話のみで相談を済ませる人は少なく，ほとんどの人は電話後にきのこを持って当所へ来た。また，来所が困難などの理由できのこを当所へ送って来る場合が毎年数件あった。

表1　形態別相談件数

(単位：件)

相談形態	1997年	1998年	1999年	2000年	2001年	計
来　所	87	88	56	137	66	434
電　話	5	13	6	2	9	35
配　送	2	2	6	2	2	14
計	94	103	68	141	77	483

3.3　月別相談件数

月別の相談件数を表2に示す。野生きのこの最盛期である10月の相談件数が圧倒的に多く，次にその前後の9月と11月が多かった。件数は少ないが秋以外の季節でも相談があった。また，秋の野生きのこの発生が不順であった1999年と2001年は，順調に秋の野生きのこが発生した他の年に比べ，10月の相談件数が極端に少なく，その結果年間相談件数も少なかった。

表2　月別相談件数

(単位：件)

月	1997年	1998年	1999年	2000年	2001年	計
1	1	1	2	2	2	8
2	0	1	0	1	3	5
3	1	0	0	0	0	1
4	0	6	1	1	2	10
5	0	2	0	3	2	7
6	0	0	3	1	3	7
7	1	3	5	1	1	11
8	2	5	2	1	1	11
9	9	4	17	5	17	52
10	70	60	22	110	25	287
11	8	17	13	13	12	63
12	2	4	3	3	9	21
計	94	103	68	141	77	483

3.4　相談者性別相談件数

年間相談件数について相談者の性別内訳を図2に示す。相談者は女性より男性の方が多く，5年間の相談件数の7割以上が男性によるものであった。

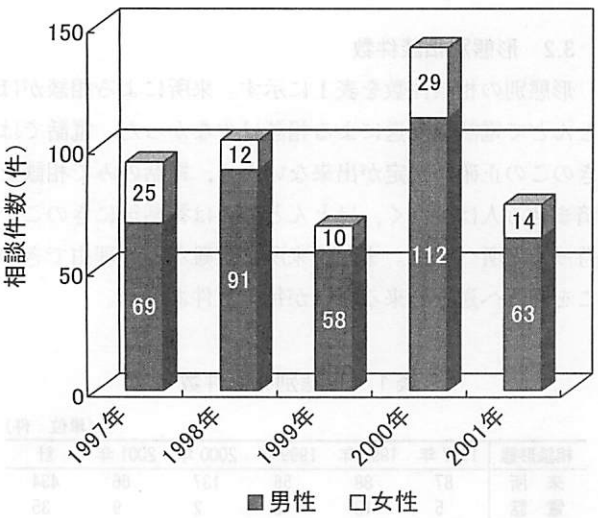

図2　相談者性別相談件数

3.5　相談者住所別相談件数

年間相談件数について相談者の住所別内訳を表3に示す。市郡別にみると，三次市が67.5%で最も多く，次は，双三郡7.5%，高田郡4.8%，比婆郡4.6%の順で，いずれも三次市近隣の地域であった。また，大都市の広島市は2.5%と少なかった。三次市について，人口が集中している市街地（十日市地区・畠敷地区・南畑敷地区・三次町）とその他の地区で分けると，5年間の相談者件数は市街地177件，その他の地区149件でほとんど差はなかった。

表3　5年間の相談者住所別相談件数

(単位：件)

住所	件数	住所	件数
三次市	326	呉市	4
双三郡	36	尾道市	4
(布野村)	(13)	甲奴郡	4
(三良坂町)	(7)	(甲奴町)	(4)
(吉舎町)	(6)	神石郡	4
(君田村)	(6)	(神石町)	(3)
(三和町)	(2)	(油木町)	(1)
(作木村)	(2)	賀茂郡	3
高田郡	23	(大和町)	(2)
(吉田町)	(9)	(豊栄町)	(1)
(向原町)	(5)	三原市	2
(甲田町)	(4)	府中市	2
(高宮町)	(4)	廿日市市	2
(八千代町)	(1)	安芸郡	2
比婆郡	22	(熊野町)	(2)
(西城町)	(8)	佐伯郡	2
(口和町)	(8)	(湯来町)	(1)
(東城町)	(3)	(吉和村)	(1)
(比和町)	(3)	山県郡	2
広島市	12	(千代田町)	(1)
世羅郡	10	(筒賀村)	(1)
(世羅町)	(5)	豊田郡	2
(世羅西町)	(3)	(本郷町)	(1)
(甲山町)	(2)	(安浦町)	(1)
庄原市	9	竹原市	1
東広島市	6		
福山市	5	計	483

3.6　きのこ別相談件数

きのこ別の5年間の相談件数は，既知種が159種825件，不明種が108件，合計933件で，既知種の相談件数が88.4%を占めた。既知種のうち，10件以上相談があったきのこは25種で，これらの相談件数が58.7%を占めた（表4）。相談件数が1件のみのきのこが種類としては最も多く62種あった。また，2件は29種，3件は11種，4件は10種，5件は6種，6件は5種，7件は4種，8件は3種，9

件は4種あった。

相談は季節によって特徴が見られた。冬期（1月・2月・12月）は10種で36件の相談があり，図3に示すとおりヒラタケ（*Pleurotus ostreatus*）とエノキタケ（*Flammulina velutipes*）の2種で相談件数の7割を占めた。また，4月・5月は8種で17件の相談があり，2件以上相談があったのは，マツオウジ（*Neolentinus lepideus*），ツブエノシメジ（*Melanoleuca verrucipes*），ウラベニガサ（*Pluteus atricapillus*），ハルシメジ（*Entoloma clypeatum*）の4種であった。

表4　5年間で相談が10件以上あったきのこ

（単位：件）

種　名	件数	種　名	件数
クリフウセンタケ (*Cortinarius tenuipes*)	43	シロシメジ (*Tricholoma japonicum*)	17
ウラベニホテイシメジ (*Entoloma sarcopum*)	41	アブラシメジ (*Cortinarius elatior*)	15
ショウゲンジ (*Rozites caperata*)	40	アミタケ (*Suillus bovinus*)	15
ハタケシメジ (*Lyophyllum decastes*)	27	シャカシメジ (*Lyophyllum fumosum*)	14
クサウラベニタケ (*Entoloma rhodopolium*)	26	カキシメジ (*Tricholoma ustale*)	12
ミネシメジ (*Tricholoma saponaceum*)	23	エノキタケ (*Flammulina velutipes*)	12
ヌメリササタケ (*Cortinarius pseudosalor*)	22	サクラシメジ (*Hygrophorus russula*)	11
ホンシメジ (*Lyophyllum shimeji*)	21	カクミノシメジ (*Lyophyllum sykosporum*)	11
ナラタケ (*Armillaria mellea*)	20	ハナホウキタケ (*Ramaria formosa*)	11
クリタケ (*Hypholoma sublateritium*)	20	スギヒラタケ (*Pleurocybella porrigens*)	10
ヒラタケ (*Pleurotus ostreatus*)	18	コテングタケモドキ (*Amanita pseudoporphyria*)	10
ムラサキアブラシメジモドキ (*Cortinarius salor*)	18	ホウキタケ (*Ramaria botrytis*)	10
スミゾメシメジ (*Lyophyllum semitale*)	17		

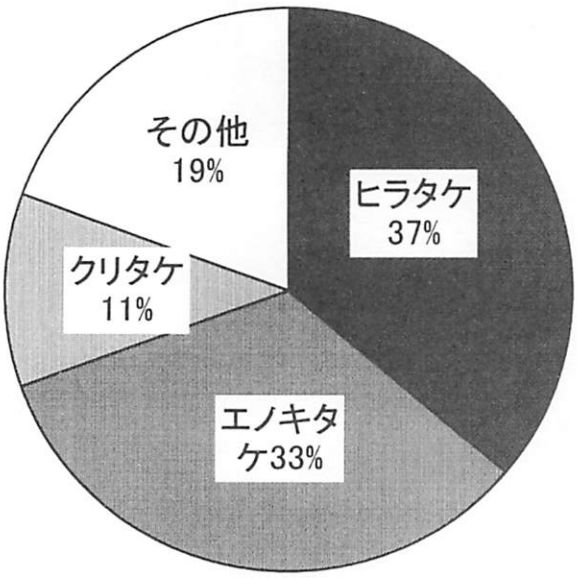

図3　冬期のきのこ別相談件数割合
（冬期：1月・2月・3月）

4．考　察

4.1　相談の傾向

森林や緑に対する関心が都市住民を中心に高まり，森林ボランティア活動などが活発に行われている[4]。野生きのこの分類・分布・料理などについて研究している同好会活動も，都市住民が中心となる場合が多い。たとえば，約200名の会員で構成されている広島きのこ同好会においては，広島市在住者が会員のおよそ7割を占め，また，広島市の他に会員が10名以上いる市町村はないという状況である[1]。これに対し，今回，野生きのこの相談に当所を利用している人のほとんどは三次市及びその近隣の地域の住民であることが明らかになった。このことは，農山村地域の住民も野生きのこに高い関心を持っていることを示すとともに，野生きのこについて知識を持った機関・団体・有識者などが存在すれば，その周辺の一般の人が相談に集まることも示していると考えられる。

表4に示した25種のきのこはいずれも一般的なきのこである。特に，相談件数が40件を超える上位3種は，県北部で古くから食用にされており，発生期に条件が整えば多量に発生する普通のきのこである。また，ヒラタケとエノキタケは冬に人家周辺の古木や枯木でよく見かけるきのこである。これらが食べられるか否かについての質問がほとんどであるが，それが野生きのこの大きな魅力である。それゆえ，植物や野鳥など他の野生生物に比べ，一部の愛好者に限らず広く一般の人が野生きのこに関心を持つと考えられる。

4.2　野生きのこの地域資源としての活用

野生きのこの多くは菌根菌である。これらは栽培が困難で希少価値があり，季節限定の特産物として地域の直販所等での販売促進が期待される。また，きのこ狩りのイベントが各地で催されるようになった。その場限りのものとせず，その地域の様々な人が連携して，農林業や観光業の活性化に結び付けて行くことが期待される。さらに，親子のふれあい，郷土の自然や文化の学習など，学校教育の場でも野生きのこの活用が期待される。

野生きのこについて豊富な知識を持った人材が最近増えている。きのこアドバイザーの県内での登録者は5名に達し[3]，広島きのこ同好会では鑑定士を育成しきのこ狩りなどのイベントに派遣している[2]。このような人材を指導者・助言者として積極的に活用することにより，野生きのこによる地域活性化の取り組みがより円滑に進むものと思われる。

5．参考文献

1） 広島きのこ同好会（2001）広島きのこ同好会会員名簿（平成13年4月），広島きのこ同好会.
2） 枯木熊人（2001）同好会の過去を振り返って，広島きのこ同好会会報No.13，6～8.
3） 日本特用林産振興会（2001）きのこアドバイザー，日本特用林産振興会，創刊号，37pp.
4） 林野庁編（2001）平成12年度林業白書，日本林業協会，44～45.